

# 投稿の掟

小野 浩

(一橋大学教授、『日本労働研究雑誌』編集委員)

## ●編集委員会より

『日本労働研究雑誌』（以下、本誌）にとって、特集テーマへの依頼論文と投稿論文は車の両輪に当たります。依頼論文は、本誌編集委員会が選定したテーマに沿って、その分野に通暁する研究者に論文執筆をお願いするものです。それに対して投稿論文は、論文の投稿を広く募り、優れた労働分野の学術研究を広く社会に知らせる役割を担っています。総じて掲載に至った投稿論文は学界等において高い評価を得ており、本誌の投稿制度は日本の労働研究において重要な役割を果たしてきたと自負しています。これも、ご投稿いただいた皆様や審査にご協力いただいた査読者の皆様のご尽力の賜物であり、ここにあらためて御礼申し上げます。

編集委員会としては、得られた評価を維持・向上させるべく、努力を続けていきたいと考えております。同時に、投稿者の皆様にもご協力をお願いしたいと存じます。その点をご理解いただくために、本誌の査読プロセスの概略をご紹介します。

論文が投稿された際には、編集委員会内で担当者が割り振られると同時に、その論文を審査するのに最もふさわしいと編集委員会が認める方に査読を依頼します。担当者は当該の論文を熟読、論文の内容や問題点などを把握して、査読レポートの返送に備えます。査読者からレポートが返ってくると、それを参考にして担当者が判定提案を作成し、それを編集委員会に諮ります。月例の編集委員会では、投稿論文審査の時間が設けられ、その場で担当者による判定提案が行われます。そこでは、担当者の判定提案が妥当であるかどうかを見極めるために、ときに長時間を費やして編集委員同士の議論がなされます。こうしたプロセスを経て、ようやくひとつの投稿論文に対する判定が決まり、それが投稿者に返送されることとなります。改訂の指示を受けた投稿者は、必要な改訂を施して再投稿を行います。

実は、こうした査読プロセスにおいて、投稿論文の「質」が大きな役割を果たします。もちろん、最初からパーフェクトな投稿論文は数少なく、査読プロセスにおいて何らかの形で改善が行われるのが一般的です。それでも、投稿段階で論文が最低限の要件を満たしていなければ、様々な問題が生じます。そして残念なことではありますが、そうした投稿論文が、最近目に付くようになってきています。具体例としては、既存研究の把握が弱いために新たな貢献が不明になっている論文、必要な情報が盛り込まれていないために妥当な分析が行われていないか判断がつかかねる論文、文章構成力が弱いために執筆の意図が汲み取りにくい論文などです（より詳細には本論をご参照ください）。

こうした論文に対しては、当然ながら不利な判定が行われてしまいます。最終的に掲載に至るにしても、改訂の回数が増えて、投稿者自身にとって大きなロスが生じます。それだけではなく、経済学で言うところの「外部不経済」も発生します。例えば、こうした論文が増えると、査読者にとって論文内容の把握に時間がかかるだけでなく、レポート作成時の負担が増大し、再投稿により同じ論文を何度も審査しなければならない状況にもなって、査読の負担が重くなります。最悪の場合には、審査にご協力いただけなくなるリスクも高まります。本誌の審査態勢の強みのひとつは、各論文を審査するのに最も適切な査読者を確保してきたことにあるので、編集委員会として現在の状況に懸念を抱いております。また、編集委員会内部での判定作業においても、学術的な内容以外の議論が増えてしまい、審査の効率性が低下する懸念もあります。ですから、審査態勢全体を健全な状態に保つためにも、投稿者の皆様には是非ご協力をいただきたいと存じます。

そこで、以下では投稿者には是非とも押さえておいていただきたい項目を記した、小野浩編集委員による「投

稿の掟」を掲載します。これは、小野編集委員が書いた草稿をもとに、編集委員会において議論して掲載を決定したものです。編集委員会はこれまで、労働分野における国内最高の査読付き学術雑誌としての本誌の発展を期すために、玄田有史「投稿のすすめ——私的経験から」（2005年11月号）および小野浩「学術論文の『パッケージング』——投稿作法を考える」（2014年4月号）の2つのエッセイ、そして川口大司・佐藤博樹・中窪裕也・佐藤厚「投稿の作法（座談会）」（2005年11月号）を掲載して投稿の促進を図ってきました。この「投稿の掟」も目指すところは同じですが、とくに投稿を志す人が『パッケージング』を行う前に理解しておくべき必要最低限のチェックリストをまとめています。投稿を検討されている研究者の皆様のみならず、大学院生や指導教員の皆様にもご一読いただきたいと存じます。その上で、本誌への投稿をご考慮いただければ幸いです。編集委員会を代表して

太田 聡一  
 （『日本労働研究雑誌』編集委員会座長）

『日本労働研究雑誌』の編集委員に就任して、数多くの論文とレフェリーレポートに目を通す機会をいただいた。編集委員としては、優秀な論文を掲載し、本誌の評価とインパクトを更に高めることが使命だと考える。投稿論文は最新の研究を紹介する貴重なフォーラムであり、積極的に質の高い論文を紹介していきたい。このため、私としては、投稿論文の採択率を上げることを常に心掛けている。

ここで紹介する内容は、投稿に求められる必要最低限のチェックリストである。今までの私の審査・編集経験を踏まえて、投稿論文がリジェクトされる理由とその対処法というかたちでまとめている。今後投稿される際に、少しでもリジェクトの可能性を低くするために参考になれば幸いである。

### 初稿から真剣勝負

投稿者の中には、「初稿だから、とりあえず草案を提出し、フィードバックを得てから再提出すればよい」と考えている人もいるようだ。これは大きな勘違いであり、査読者に対して失礼である。とりわけ本誌は優秀な査読者に恵まれ、緻密にかつ丁寧に審査をしていただいている。だからこそ編集委員としては、査読者の時間を無駄にしたいと強く感じる。

小野（2014）では、「書き手はアクセプトされる確率を上げると同時に、リジェクトされる確率を下げることを目指す。言い換えれば、リジェクトされる言い分をできる限り無くす努力が求められる」と書いた。論文審査を査読する側の立場か

ら考えていただきたい。査読者は貴重な研究時間を割いて論文を審査することになる。完成度の低い論文は査読者の気分を害して、リジェクトの可能性を高めることになる。極端な例を言えば、「表1を参照」と書いてあるにもかかわらず表1が含まれていないという論文を見かけたことがある。さすがに誰でもうんざりするだろう。査読者の忙しい状況を汲み取り、いかにして減点を防ぐか、もう少し配慮していただきたい。

セミナー・学会などの発表を通してフィードバックを受け、幾度も書き直し、初稿から磨き上げられた論文を提出してほしい。玄田（2005）も「投稿のすすめ」の中でこのメッセージを繰り返している。書き間違いやミスをなくし、「中途半端でない論文」を提出するのは、投稿の原則であると同時に、査読者に対する基本的な礼儀である。

### 仮説検証型が基本

研究論文の基本は、理論に基づいた仮説検証型である。既存のパラダイムから理論は生まれ、理論から仮説が構築され、仮説を検証してから理論が支持（または否定）される。このように「理論→仮説→検証→理論」が原型になっている。

仮説には、理論仮説すなわち理論的な考察にもとづいた仮説と、作業仮説すなわち分析手法を通して検証可能な仮説の二つがあり、理論仮説から作業仮説が導かれるという基本的な流れになっている。しかし、この構成が守られていない論文が目立つ。専攻分野によっては多少のバリエーションは認められても、理論仮説なしにいきなり作業仮説から始まっている論文は問題である。この類

の論文は理論が浅く、内容が記述的で全体的にインパクトが弱い。中には仮説が明示されないまま検証に進むという論文さえある。また、結果が得られてから遡って、「この結果はこの理論と整合性がある」と説明するものもあり、いかにも分析が終わってからこじつけたような印象を残す。

### メカニズムを知りたい

工学・物理学の世界でいうメカニズムとは、機械の構造とその仕組みを指す。最近では社会科学でもメカニズム（または social mechanism）という表現が使われるようになった。社会科学におけるメカニズムは、説明しようとしている現象の仕組みを解明することを本来の目的としている。しかし最近の傾向として、メカニズムという表現を誤って使っている投稿論文が目立つ。なお、この傾向は本誌に限らず、海外の学術誌でも見受けられる。

社会科学においてメカニズム・アプローチを提唱してきた代表的な文献に、Hedström and Swedberg (1998) が挙げられる。著者によると、メカニズムの説明は以下ようになる。ここに単純に次のようなインプット ( $I$ ) と結果 ( $O$ ) の関係があったとする。

$$I \rightarrow \boxed{M} \rightarrow O$$

$I$ はどのようにして  $O$  の結果を生み出すのか？メカニズム ( $M$ ) はこの仕組みを明らかにする。社会科学で因果関係を確立することは容易ではないが、少なくとも単純な相関はメカニズムとは言わない。

例えば、大企業が小企業よりも賃金が高いという結果が得られたとしよう。この関係自体は相関であって、メカニズムの説明にはなっていない。メカニズム・アプローチでは、なぜ大企業の方が賃金が高いのか、もう一步踏み込んだ説明が求められる。この「なぜ」を明かすからくりがメカニズムであり、メカニズムの説明を取り入れた論文には付加価値がある。

社会科学の進歩には、単純な統計的相関を超えて、 $I$ が  $O$  を生み出すメカニズムを暴くことが今後一層求められる。メカニズム・アプローチが重

要視されるようになってから、研究者の中でメカニズムという表現を使う傾向が強まっている。しかし、その表現とは裏腹に、「なぜ」に言及せず実証分析の結果を淡々と報告するにとどまり、自身がメカニズムの説明になっていない論文が増えているのは問題である。メカニズムという表現を使う場合は、言葉だけでなく真の意味で仕組みを明らかにする研究を期待したい。逆に、 $I$ が  $O$  を生み出す仕組みまで言及していない研究論文では、メカニズムという表現を安易に使うことは避けたほうがよい。

### 技術よりストーリー

最近ではCGなど特殊効果技術の著しい進歩のおかげで、すさまじく迫力のある映画が数多く登場している。しかし、技術任せの映画の寿命は短い。いつの時代でもどこで見ても楽しめる普遍的な映画というのは、ストーリーが面白い映画である。

学術論文は、ハリウッド映画ほど迫力はないかもしれない。ただ、印象に残るのはストーリーに優れた作品であるということは映画と共通している。ところが最近、技術任せの論文が増えている。ここでいう技術というのは主に計量手法であり、つまり複雑な計量手法を使ってインパクトの高い論文を目指している。難しい計量はきちんと評価したいが、ストーリー性に欠けているのは問題である。質の高い論文というのは、技術かストーリーかのどちらかではなく、その両方がうまくかみ合っ初めて成り立つわけだ。

統計分析には一般的に、理論面の正当性と計量面の正当性が求められる。統計モデルの選定、モデルに含まれる変数や操作変数の選定など、統計分析を進めるにあたっては常に両側面の正当性が問われる。例を示そう。賃金関数を推計した結果、大卒より高卒の方が賃金が高いという結果が得られたとしよう。だが、この結果は明らかに常識に反する。(人的資本を始め)理論面では整合性がなく、かつ先行の実証研究から判断しても意外である。しかし、投稿論文の中には、統計分析から得られた結果であることを主張してそのまま説明無しに報告されていることもある。要するに計量面の正当性を貫き、理論面の正当性を無視している。

仮に高卒の方が大卒より賃金が高いという結果が得られた場合、なぜそのようなになったのか読者を説得する努力が必要である。

計量任せでストーリーは二次的という論文が目立つ。繰り返すようだが、どちらかを満たしていればよいのではなく、統計分析には理論的な正当性と計量的な正当性の両方が要求されることを心得ておいていただきたい。

### 文献レビューは怠らない

参考文献には量と質がある。投稿論文を審査していて目立つのは、まず参考文献リストが著しく短いことである。20枚の原稿に文献が5件というものもある。英語の文献に関しては更に限定的である。

投稿論文では、文献レビューの果たす役割は大きい。文献レビューで先行研究を調べ、既に知られていることとまだ知られていないことを判別し、その中で自分の研究がどのような貢献をするのかを明らかにする。短い参考文献リストは、すなわち先行研究のレビューが浅はかであることを意味する。文献リストがあまりにも短いと、先行研究をきちんと読み込んでいない、「思い込み」の論文に過ぎないという印象を査読者に与える。

現に査読者からのレポートにも「先行研究レビューが不十分」というコメントは頻繁に見受けられる。それぞれの研究分野においては、しかるべき権威の研究者とインパクトの高い「核となる」文献が必ずある。「核となる」文献を引用していない投稿論文は、求められている最低限の「宿題」をやっていないとみなされ、それだけで大きな減点になってしまう。

次に、文献の質の問題がある。まず、引用されている文献が（1970年代～1990年代など）古いものが多い。古い文献を中心に書かれた論文は、最近の研究動向を的確に把握していない。また、分野によってはその逆に、最新の文献のみが掲載され、その分野の「核となる」文献が引用されていないものも見かける。最近の研究動向は掴んでいないものの、研究の基盤となる理論的考察が弱い。

英文（ないし海外）の文献が極端に少ないのも問題である。日本の労働現象を見ているため日本

の文献が多くなるのは尤もだが、日本の文献に偏りすぎると研究のスコープが狭いという印象を与える。海外の主要文献をきちんと調べ、海外の先行研究との共通点を見出してほしい。自分の見ている現象が必ずしも日本特有の現象ではなく普遍的なテーマであるというように、big pictureをアピールする努力が必要だろう。

逆に日本特有の現象であることを主張したい場合でも、海外の文献は役に立つ。この場合、論文の組み立て方としては、導入部分で、「欧米ではABC理論に基づきEFGの現象が確認されているが、日本の場合は（しかるべき）理由により、必ずしもABC理論が成り立たないかもしれない」等々パズルとして紹介することができる。海外の文献から得るものは多いため、もっと積極的に取り入れていただきたい。

なお、質的な面でもう一点気が付くのは、参考文献にワーキングペーパーや官庁の報告書が異常に多く含まれていることである。察するに、インターネットでキーワード検索して入手できる論文を頼りに、文献をレビューしている投稿者が多いようだ。現にGoogleでキーワード検索をすると、その分野のワーキングペーパーや官庁の報告書そのものがPDFで入手できる。手早く資料が手に入るのは便利かもしれない。しかしワーキングペーパーは査読論文ではないので、その実績が認められたわけではなく、結果が覆されることもありうる（無論、査読論文も出版後に結果が覆ることもあるが、その可能性はワーキングペーパーよりも遥かに低だろう）。また官庁の報告書はその性質から記述的統計が多く、理論的分析は少ない。言うまでもなく、ワーキングペーパーと官庁の報告書は、「核となる」文献にはなりえない。学術論文を書くには、Google検索の域を超えて、JSTORなどオンラインの学術論文データベースを活用して幅広くかつ深く文献を調べる必要がある。

このように、参考文献の量と質を同時に考慮する必要がある。「核となる」文献を掴み、日本の文献/海外の文献、新しい文献/古い文献などの適切な配分を心がけ、極端に偏りがないように注意していただきたい。

さらに、編集側の内情を話すと、論文査読の候

補者は参考文献リストから見出すことが多い（これは本誌に限った習慣ではない）。編集側としては、特定の研究分野の識者に査読をお願いするわけだから、まずは参考文献リストを考慮するのは自然の成り行きである。投稿者の中にはこの事情を戦略的に使い、この人に読んでほしいと思う研究者、または自分の研究に都合のよい研究者の文献を参考文献に載せる人もいる（この戦略は、欧米の学会誌ではよく見かけるが、特段悪いことではない）。実際、査読者としても、受け取った論文の参考文献を見て自分の文献が引用されているか否かは気になる場所である。いずれにしても、文献リストが短いということは査読候補者を限定させることになる点には留意すべきだろう。

## 最後に

大学院時代のアドバイザーにこう言われたことがある。「研究者の人生はリジェクトの人生だ。膨大な時間を研究に割き、数多くの研究論文を投稿し、ほぼ同じ数のリジェクトをくらい、たまに採択通知をもらう」。決して楽な職業ではない。しかし論文が採択されるとその喜びは大きい。だから、投稿した論文の結果がリジェクトであっても気を落とさないでいただきたい。

採択という目先の実績だけを目指すのではなく、採択後のことも考えて、もう少し長期的な視野で執筆に取り組んでいただきたい。優秀な論文

はインパクトが大きく、発表後も長期にわたって幾度も引用されるものである。自分が誇りに思える完成度の高い研究論文を目指していただきたい。

投稿者として、リジェクトされるリスクを極力減らすことは十分できる。本稿で紹介した内容は投稿者の最低限のチェックリストであり、査読者に対する基本的な礼儀でもある。本誌に限らず、今後皆様が投稿される論文の質が更に向上するよう、この「掟」が少しでも貢献できれば幸いである。

## 参考文献

- 小野浩 (2014) 「学術論文の『パッケージング』——投稿作法を考える」『日本労働研究雑誌』 No.645, pp.58-63.
- 川口大司・佐藤博樹・中窪裕也・佐藤厚 (2005) 「投稿の作法（座談会）」『日本労働研究雑誌』 No.544, pp.43-53.
- 玄田有史 (2005) 「投稿のすすめ——私的経験から」『日本労働研究雑誌』 No.544, pp.54-59.
- Hedström, Peter and Richard Swedberg (1998) "Social Mechanisms: An Introductory Essay," *Social Mechanisms: An Analytical Approach to Social Theory*, Edited by P. Hedström and R. Swedberg, pp.1-31. Cambridge: Cambridge University Press.

おの・ひろし 一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授。最近の主な論文に "Welfare States and the Redistribution of Happiness," Ono, Hiroshi and Kristen Schultz Lee (2013) *Social Forces*, 92 (2) : pp.789-814. 労働社会学、労働経済学専攻。